

瞳をひらいて 子どもたちとアート

アラ・ゴルディンさん (オスロ国際子ども美術館館長)

この春、東京・渋谷の「こどもの城」で、ノルウェーと日本、そして各国の子どもの絵百数十点からなる展覧会が開かれる。主テーマは「平和と国際理解」。展示構成に協力するノルウェーの「国際子ども美術館」は、世界各地でユネスコ、ユニセフなどと大規模な展覧会を行っている。今回の開催に合わせて、館長のアラ・ゴルディン博士から婦人之友読者へメッセージが届いた。

アラ・ゴルディン博士とラファエル氏(94年逝去)



人類共通の文化である「子どもの美術」の収集、保存、展示を目的として1986年に映画監督のラファエル氏と二人の美術館を設立しました。現在では180ヶ国から10万点以上の絵画や彫刻などを収蔵、人間や社会環境に関するさまざまな問題に対する子どもの考えや気持ちを知る

貴重な資料となっています。作品に見られる「想像の世界」は決して非現実的なものではなく、子どもはそれの中に現実を発見しているのです。美術館を訪れる子どもも、他の国々の文化、習慣や暮らしを知ること、自分の世界をどのように表現するか創作意欲をかきたてられます。意味のある人生をおくるには、文化的、精神的ひろがりが必要であることを知らしめるのも大人の責任のひとつです。日本の展覧会では、子どもの芸術の豊かさや知的で深い意味を込めたメッセージを洗み取ると共に、子どもから多くを学び取っていただければと希望します。

写真は、オスロ国際子ども美術館の展示風景。音楽やダンス室も備えて、さまざまな活動が行われている。ゴルディン夫妻が私財を投じて設立。私設財団が所有し独立採算だが、文化省と市の助成金、各種スポンサーの援助で運営されている。「瞳をひらいて」展は3月26日14日15日まで、ノルウェーの文化を紹介した展示パネル・絵本なども。

